

Title	歌語ひとつ : 「すだく」考
Author(s)	島津, 忠夫
Citation	語文. 1987, 48, p. 3-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/68752">https://hdl.handle.net/11094/68752</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 歌語ひとつ — 「すたく」考 —

島津忠夫

俊恵法師の『林葉集』の中に、

すたきけんぬしはと問ば女郎花くちなしにして露ぞこぼるる

という一首がある。この初句を俊恵の意図にそくして解するならば「すたく」は「すむ」の意とするのがもっとも的確であろう。『綺語抄』に「或人はすむといふとぞ」とあり、「四条大納言歌枕にもすむと云々」と見えるという。『色葉和難集』には、祐盛の見解をあげ、「すたく」は「すむ」の意に解すべきことを述べているが、この祐盛は俊恵の歌林苑仲間であり、俊恵の掲出の歌は、「すたく」を「すむ」とする見解に立って詠まれたと見られる。

## 二

ところで、その「すたく」という語については、今日もお見解の一致を見ていない。現今の辞書につくと、次の三通りの立場があることが知られる。

(A) 『新潮国語辞典』①群がる。多く集まり寄る。②(後世の誤用) 虫などが鳴く。③呼吸が苦しくなる。

(B) 『小学館日本国語大辞典』①多くのものが群がり集まる。多数が群がる。②多くの虫や鳥などが集まって鳴く。

(C) 『岩波古語辞典』①集まってさわぐ。②多く集まる。

別項に「すたき」をあげ、「はあはあとせわしく息をする」とする。

(A)(B)は「多く集まる」を原義とし、特に(A)は「虫などが鳴く」を「後世の誤用」とするのに対して、(C)は逆に「集まってさわぐ」の方を原義としている。さらに、(A)が「呼吸が苦しくなる」を転義とするのに対して、(B)(C)は別語としている。従って、いまはその用例にそくしてこの語の展開を考察し、歌語としての成立、さらに、その歌語の解釈の上に立って、新しく和歌がよまれていく過程を明らかにしておきたいと思う。

## 三

「すたく」の用例は、『万葉集』に四例見られる。

(イ) 夏麻引く海上瀾の沖つ洲に鳥は簀竹と君は音もせず(一一七九八—一七六)

(ロ) 葦鴨の多集池水溢るとも設藩の辺に我れ越えぬやも(二二八四四—二八三三)

この歌「古今和歌六帖」では、「あしがものすたく池水まさるともあせきのかたに我こひめやは」とよまれている。

(ハ) 野も多に鳥須太家りと……葦鴨の須太久古江に……(四〇三五—四〇一一)

(二) 大君は神にしませば水鳥の須太久水沼を都と成しつ (四二八五八四三二一)

『古今和歌六帖』もほぼ同じよみでとりあげている。

ほかに、『古今和歌六帖』には、

(ホ) にほとりのすたくいけみづ心あらばきみにわがこひこころしめさね

があり、これも万葉歌で、「にほ鳥の潜池水」(七二八八七二五)の

「潜」(かづく)を、「すたく」とよんだもので、歌学書の類では、この歌も「すたく」の例として考えられている。<sup>注3</sup>

すでに指摘されていることであるが、この四例、いずれも馬に用いられていて、ただ集るといふよりは集って騒ぎ立てている意ではないかという。とくに(イ)の例など、「君は音もせず」と対応して、<sup>注4</sup>「集まり騒ぐ」(新潮日本古典集成『万葉集』頭注)と解さなければ落ちつかない。

四

万葉以後、「すたく」が集中的に見られるのが、『好忠集』である。

(一) 我やどにいたみの水やぬるむらんそこのかはづぞこゑすたくなる

(ト) ねやのうへにすずめのことゑすたくなる出たちがたに子やなりぬらん

(チ) むしのねぞ草むらごにすたくなる我もこのよはなかねばかりぞ

(リ) ながぎよにすたきし虫をいとひしにいまはあらしのをとそはげしき

の四例が見られ、蛙・雀・虫によまれている。それに、(一)(ト)が

「声ぞすたくなる」、(チ)が「音ぞ……すたくなる」であり、(リ)も下句の「いまはあらしの音ぞはげしき」に対応して、「すたく」が、声、音について言っていることは明らかである。曾根好忠のことだから、おそらくは万葉語の意識で用いていると考えられるが、好忠の誤解と見るよりは、「すたく」という語のもつ原義に近かったのではないかと思う。

五

ところで、「すたく」の比較的早い用例として、『伊勢物語』があり、のちにしばしば問題とされている。<sup>注5</sup>

(又) むかし、心つきて色好みなるおとこ、長岡という所に家つくりて居りけり。そこの隣なりける宮ばらに、こともなき女どもの、田舎なりければ、田刈らんとて、このおとこのあるを見て、いみじのすき物のしわざやとて、集りて入り来ければ、このおとこ、逃げて奥にかくれにければ、女、

せぬ

荒れにけりあはれ幾世の宿なれや住みけんひとのをとづれも

といひて、この宮に來居てありければ、このおとこ、  
律生ひて荒れたる宿のうれたきはかりにも鬼のすたくなりけり

とてなむ出したりける(下略)(五八段)

この「鬼のすたく」はただ鬼が集ると解したのでは落ち付かない。<sup>注6</sup>「すたくはがやがや集まる意」(新潮日本古典集成『伊勢物語』)とすれば、この場の状態に幾分ふさわしいといえよう。ところで、真名本の『伊勢物語』では、「すたく」に「出入」と宛てている。これは一つの解釈であって、さきにあげた『色葉和難集』の祐盛の見

解に對して、

和云、すたくとは出入也。いでいるといふことなりといふ人あり。すむにもたがふまじくや。

とあるのとかかわりがあるう。「出で入る」とする解釈は、藤原清輔の『奥義抄』に「すたくとは一説にはいでいるところをまうすめれ」として、後出(ル)の歌を例に引いており、『和歌初学抄』和歌色葉にも一説として踏襲されている。息の「出で入る」、すなわち、鬼がはあはあ息をしている状態ととることができるならば、この歌はいかにもふさわしい。そこで、はじめにあげた辞書の(A)が③に立て、(B)(C)が別項に立てている解と結びついてくるのではないか。それは、この語が、「病猪の宇多岐恐み」(『古事記』歌謡・九八)の「うたく」とのつながりをもつ語ではなかつたかと思われてくる。

『日泊辞書』が「Sutaku」のほかに「Sutaku」をあげ、<sup>注9</sup>「すためく」に同じとし(「すためく」は「苦しくて疲れたたびれ、はあはあ」と息をつく」の訳語をつける)、<sup>注10</sup>天正十八年本の『節用集』に「呻」に「スタク」と付訓しているなど、<sup>注11</sup>中世末期には、歌語としての「すたく」と別れて存在し、

七陽の時分ナルニ熱ハソレホド有マイニ牛ハ近クカラ引テコウズカ、卅界アツケレバソスタクラウ(蒙求抄・四)

前行ハサキヘススムデイヌゾ。牛ガ喘イテ舌ヲハイテ居タヲ見タ

ゾ(蒙求抄・四)

アマリニ sutagi ayeguite イキヲツキエザレバ、シバシワモノ  
モスコトモカナハズ(バレット写本)

急げ／＼といふ声も喘、せぐりて玉の緒も引入るごとく見えけれ

ば(絶狩剣本地・三)

声いぎどしくすたきながら(関八州繫馬・三)

喘急……気が盛に成ればすたくものなり。呼吸の早き事なり(病論俗解集)

など、中世・近世の用例が散見するが、もとは同一の語ではなかつたかと思うのである。

(ル) かはらの院に、あれたるやどの心、人々よむに

すたきけんむかしの人もなきやどにたゞかけするはあきのよの

つき(惠慶集。『後拾遺集』秋上に入集)

(ヲ) まねかねどあまたの人のすたくなかといふ物ぞたのし

かりける(兼盛集)

(ワ) 遍照寺に月を見て

すたきけむ昔の人はかげたえてやどもる物は有り明けの月(新古今集)雑上・忠盛)

の人についてよまれた「すたく」も、本来息づかいを表現した語と

すればうなずかれよう。それは、『万葉集』における鳥の例ともつ

ながってくる。

## 六

従来しばしばとりあげられた例であるが、

(カ) わが御殿の明け暮れ人しげくもの騒がしく幼き君たちなど

すたきあわてたまふにならひたまひて、いと珍かにもあはれ

なり。(『源氏物語』横笛)

(ヨ) さをしかのすたく麓の下萩は露こきことのかたくもあるか

な 兵部君(天禄三年女四宮歌合、源順集)

(タ) 今日きけばぬのかはづもすたくなりなはしろみづをたれ

まかすらん(重之集)

(レ) みがくれてすたくかはづのもろごゑにさわぎぞわたるゐでのうき草 良暹法師(長久二年弘徽殿女御歌合)『後拾遺集』春下所収)

(ソ) なにごとをかはづこゑくすたくらむ春暮れ方のゐでのわたりに 小馬君(天喜四年六条齋院歌合)

の「すたく」は、集つて騒ぐ、鳴くの意にも、ただ集るの意にも解することが出来るが、(カ)(ソ)の例はどちらかといえば、集つて騒ぐの意というべきであらう。

ところが、

(ツ) 草茂み置ける露かとみえつるはすたくほたるの光なりけり 式部(天喜五年六条齋院歌合)

(ネ) 沢水にすたく螢のひかりには草の根ざしもかくれざりけり さいも(治暦二年以前六条齋院歌合)

(ナ) 雲井にてすたく河辺のはたるかなあまつほしかとみえまがひつつ(嘉保三年兵衛佐師時家歌合)

の螢について「すたく」といった例が六条齋院様子内親王家の歌合に見え、ここにどうしても「すたく」を多く集るの意に解さなければならぬことになる。さらに、

(ラ) おほゐがはせとにひまなきかどり火と見ゆるはすたくほたるなりけり 顯季

(ム) なにはへのくさばにすたくほたるをばあしまのふねのかゝりとやせん 公家

(ウ) ながれゆくかわべにすたくほたるをばいさごにまじることがねとぞみる 隆源

と、「堀河百首」に見え、平安末期になると、

(牛) 草のはにすたくほたるのでらす火はしげみがしたももえぬなりけり(行重集)

(ノ) すたきこし沢の螢はかげ消へてたへく宿るよひの稲妻 寂蓮(六百番歌合)

など、「すたく螢」とよまれることが多くなつてくる。

その過程を考えるに当って、次の例はきわめて注目されよう。

(オ) 山川に心ばそくぞすたくなるひとつみなるをしにやあるらむ

すたくといふことを心ばそしとはいかがいふべからむ。もしあまたある声をいふにやあらむ。(応徳三年故若狭守通宗女子達歌合、通俊判)

この歌の「すたく」は、鶯鶯について言っている。鶯鶯は水鳥ではあるが、その番いを離れた鶯鶯を「心細し」ととらえたところに「すたく」を用いたことを、藤原通俊は難じていて、通俊は「すたく」を「あまたある声」と解していたのである。この判に対して、藤原範兼の『和歌童蒙抄』では、

すたくといふ事は通俊卿もよくしらざりけるにや。さばかりの人のかくかゝれけむ、あるやうある事にやあらむ。

と言っている。範兼は、「すたくとは多集と書きて、万葉集によみたれば、おほくあつまるをいふ詞也」と解していたのである。それは、『八雲御抄』にも「すたく」を「たゞあるなどいふ心也。万葉には多集とかけり。あつまる心にいふべし。二玉鳥のすたく池水には潜をすたくといへり」とあり、『和歌初学抄』『和歌色葉』も一説に「出で入る」をあげながら、「集る」説を立てており、前掲の『色葉和難集』のような異説もありはしたが、この『和歌童蒙抄』『八雲

御抄」の説が、以後の通説となつて、『日泊辞書』に「*Sutagau*」に、「こおろぎなど、多くの小虫が一緒になつて鳴く」の解をあげながら、補遺のところに、「また、詩人の間では集るといふ意に用いられる」と記したり、易林本の『節用集』の「集」に「*スダク*」と付訓して、「虫」と注し、『言塵集』『藻塩草』『匠材集』に「すたく」を「あつまる」の意に解するなど、以後今日までその影響を残して来たのである。

ところで、その『和歌童蒙抄』や『八雲御抄』が、その解の根拠として、『万葉集』に「多集」と書いて「すたく」とよんでいることを挙げるのに注意したい。それは(ロ)の例についていったものであるが、その解が『万葉集』の文字表現に由来していることを知るのである。(ロ)の例はたまたま「多集」とあてたもので、それが、他の例を完全におおいきる解を示すものとは言えない。平安時代において、『万葉集』がどのような形で読まれていたかは明らかではないが、『袋草紙』に、

万葉集。昔へ所在稀云々。而俊朝朝臣法成寺宝藏本ヲ申出書写之。其後頭綱朝臣又書写。自此多流布シテ至今在諸家云々

とあり、藤原頼通の実子であつた橋俊綱が、法成寺宝藏本、すなわち藤原道長が旧蔵の本を借りて書写するまでは、容易に見ることができなかつたようである。『詞林采葉抄』に「追加点人々」として、いわゆる次点を施した人々を列挙しているはじめに、法成寺入道関白太政大臣すなわち道長が見え、道長が次点にかかりを持ち、その本を秘蔵していたものと考えられる。さらに、六条斎院歌合になつて、ようやく「すたく螢」の例が見られることについても、六条斎院が頼通の養女姫子と後朱雀天皇との間に生れた様子内親王のも

とで前後二十五回もの歌合が行われている間に、『万葉集』の知識がもたらされた結果ではなかつたかと推測される。

## 七

平安末期になつて、「すたく」は、『万葉集』が流布して、その「多集」の字面に注目され、「多く集る」と解することが有力な説となり、その説にもとづいて新しい和歌がつけぎとよまれてゆくこととなつたと考えられる。はじめに掲出した俊恵の歌のように、歌林苑仲間の説によつてよまれた場合もあり、歌学の隆盛はやがて歌語の解についての新しい説を生み、さらに、それがもとになつて新しい歌がよまれてゆくこととなる。「すたく」という歌語ひとつをとりにあげ、その変遷の過程を問題としたのも、「すたく」の語史だけでなく、歌学と歌語と歌作とのこういつた関係を明らかにする一端としたと思つたからであつた。

## (注)

一、伊藤博校注『万葉集』（角川文庫）の訓により、該当部分のみ原表記を示す。A V内は旧国歌大観番号。以下同じ。

二、『類聚古集』は「すたつ」とある。

三、後掲『八雲御抄』参照。『綺語抄』が「すたく」の解を「*潜くぐる*」とするのも、この歌にもとづく。

四、たとえば、沢鴻久孝先生の『万葉集注釈』も、そのことを指摘した上で、多くの用例を検討された結果、「余意として鳴く意を含み、後世は鳴く意にも転用されるに至つた」という通説に結びつけられている。それに対して、岩波の日本古典文学大系『万葉集』の補注では、「おそらく*スダク*には集まること、音を立てること、動きまわることの三つの要件があるのではないか。螢の例は、むしろ拡張した使ひ方ではあるまいか」としている。それが、『岩波古語辞典』の①②の順序となつている

と見られる。なお、山口明穂氏「『すたく』について」(『国語研究室』三三号、昭和三十九年七月)は、大系の補注のように「集る、さわぐ」兩様の意味を兼ね備えた語であったものが、後世になって、「集る」「さわぐ」と分かれて用いられるようになったのではないかと説く。

五、『色葉和舞抄』の祐盛の解では、惠慶の(ル)の例とともに「すむ」のよりどころとしている。なお、辞書(A)(B)(C)ではいずれも例にあてていないことも注意しておきたい。

六、岩波の日本古典文学大系『伊勢物語』(大津有一氏校注)では、従来「多く集る」と解する説に従って頭注を付しているが、小学館の日本古典文学全集『伊勢物語』(福井貞助氏校注)では、頭注は「すたくは多く集まる意」としながら、口語訳では「鬼さんたちが集まって騒ぐからなのでしよう」と訳している。

七、渡辺実氏校注。

八、川端善明氏『活用の研究I』には、「スタク」と「ツドふ」を(a)の交替としてとらえられている。

九、歌語の「すたく」は「スタク」とふつう濁音によまれている。『万葉集』に第二首節は「太」で記され、濁音仮名として用いられることが多いが、「太」を清音仮名として用いた例もあり、厳密には明確ではない。

ただ、「千草にすたく蟋蟀のきりぎりす」(『平家物語』巻七、福原落)「秋の野の草葉にすたく虫までも」(謡曲「松虫」)は、平曲や謡曲では「スタク」と発音され、中世以降は「すたく」となる。それに対し、『日ボ辞書』や『バレット写本』に「Sustake」と清音でローマ字化されている「すたく」は、両様の例があり、清濁のちがいで、別語とすることはできない。

一〇、訳語は、『邦訳日葡辞書』による。

一一、文明本節用集も同じ。

一二、『言海』は、「すたく(集)」の項に、「アツマル。多ク集フ。ムラガ」と語義を記し、(三)カ(ヨ)キ(ヌ)の例をあげている。

一三、前掲山口明穂氏の論考にもそのことを指摘する。

(付記)

昭和五十七年七月七日、武庫川女子大学で行われた和歌文学会関西例会に発表した草稿に加筆補訂を加えたものである。その折ご教示いただいた方に謝意を表す。ただ、私見の大半はその折の発表と大きく変わっていない。その後そのままにしていたが、一応、わたくしの見解のままでまとめてみて大方のご批判を得たいと思う次第である。